観天望気

今宵の一献

もう20年以上前から、全国各地の酒場をめぐり歩いている。その土地の日本酒を味わい、そこに集う人々と出会う。

お酒はおいしいだけでなく、最高のコミュニケーションツールだから、酒場めぐりはやめられない。酌み交わせば、あっという間に心の距離が縮まる、心と心の壁をとかすアイテムだ。人と知り合うことで、人生は豊かになる。

日本酒は美しい自然のなかで進化している。それぞれの蔵元では、個性あふれる酒が造られている。日本の酒に新しい風が吹いている。

日本酒が海外でもっと受け入れられる可能性は大いにある。なぜなら、「おいしいもの」は国境を超えて理解されるから。さらに僕は、海外に行った際に、日本酒は百薬の長だと勧めている。

日本酒を売り込むターゲットは、同じ醸造酒であるワインを愛する欧米人。殊にフランス人は日本酒を味わい、理解するための舌が備わっているように思う。

海外で評価されることで、洗練されたイメージが日本に広がり、日本の若者が関心を持つようになる。穏やかにやさしく、食の好循環が展開されていく。

コロナ禍の現在、酒場は営業自体が難しく、各地の蔵元で酒の在庫が積みあがっており、特Aの酒米を生産している農家でさえも米が余っていると聞く。心が痛む限りだが、しばらくはじっと耐えしのぐしかない。しかし、いつか必ずコロナは終息する。終息後の人と酒の向き合い方を展望したい。

僕は酒を飲むときに、人との距離、間合いを大切にしてきた。余談だが、正統派のバーでは、バーテンダーはお客との距離を大事にしているという。面と向かって話すことが感染リスクと捉えられたことで、こうした飲み方がより意識されてくる。

今宵の一献は、日本酒をスマートにたしなんでみてはいかがだろうか。

吉田 類
酒場詩人

よしだ るい
1949年高知県生まれ。エッセイスト、俳人。居酒屋探訪家として活躍中。画家としてパリを中心に活躍後、文筆業に活動の場を広げる。高知県観光特使。俳句愛好会「舟」主宰。「吉田類の酒場放浪記」（BS-TBS）、「ラジオ深夜便」（NHKラジオ第１放送）などに出演中。著書『酒場歳時記』（NHK出版）、『酒場詩人の美学』（中央公論新社）他多数。